

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

# 2020読書メモ 11月号

特別編

## Amazon レビューを概観する



『井上成美』（新潮文庫）

（日本語）文庫 - 1992/7/29

[阿川 弘之（著）](#)

[5つ星のうち 4.6 52 個の評価](#)

『井上成美』（Japanese）Hardcover - September 1, 1986

解説

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

・帝国海軍きっての知性

・終始無謀な対米戦争に批判的

・海軍兵学校校長時代には英語教育廃止論をしりぞける

・敗戦前夜は一億玉砕を避けるべく終戦工作に身命を賭した

・戦後は近所の子供たちに英語を教えながら清貧の生活を貫いた

・狂熱の時代に、合理性を保ち続けた〈意志〉の人生

・柳沢の視点で数編をピックアップしてみると、意外なことも見えてきた…

\* \* \*

榎戸 誠

## 1. 米国との戦争は絶対に避けるべきと考えていた海軍の米内光 政・山本五十六・井上成美

・井上に関することは公私を問わず、可能な限り盛り込みたいという著者の意欲が漲っている一冊

・職を賭し生命の危険を承知の上で意見書を書いた

・これだけの人の命といふものを勝手に奪っておいて、その償ひが何処にあるか。負けてよかつたといふやうな理論は、それは負け惜しみです。

・何故こんな馬鹿な戦争をやつたか、真剣にその反省と研究をすべきだ

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

・あの作戦は失敗だったとか、此の戦争しくじった、負けたとか、そのような簡単な問題ぢやないんだ。

・「井上さんの本質は教育者だったと評する人がある

・教育の仕事が一番自分に向いてゐる

・生徒をまづジェントルマンに育て上げようとした

・英語の廃止なぞ絶対認めない

・『それら一連の思ひ切った措置は、あらかじめ敗戦後の日本といふものをお考へになつた上でとられたのでせうか』 — 「<おろんそうです>。井上はきつい口調で答へた。<あと二年もすれば、日本がこの戦争に負けるのは決り切つてゐる。…負けたあとはどうするのか。とにかく此の少年たちの将来を考へてやらなくちやならん。皆で目茶々々にしてしまつた日本の国を復興させるのは彼らなんだ。その際必要な最小限の基礎教養だけは与へておいてやるのが、せめてもの我々の責務だ、さう思つたから、下の突き上げも上層部からの非難も無視して敢てああいふことをやりました>」。

\* \* \*

柳下村塾

## 2. 【私の評価】★★★★★（91点）

・人格ではなくロジックで仕事を考える人

・米国と戦った場合持久戦に持ち込まれ、石油と鉄を断たれ、日本全土が占領されるだろうと想定

・直属上司である及川海軍大臣はその意見書を放置

・言葉にはしないものの日本敗戦後の人材を育成するため、軍の求める即席の兵士育成教育を拒否

\* \* \*

村上 徹

### 3. いまだに目が醒める

・日清・日露戦争時代の脚気の抑制をめぐる陸海軍医間の一種の論争（脚気紛争といわれる）を調べているうちに、陸軍と海軍の軍医の陣営の間には、物の見方考え方に特有の相違が目立ち、それが年代とともに顕著になってゆくのを暗然とした思いで眺めた経験

・一言でいえば、海軍軍医陣の思考は科学的であり、陸軍の思考はイデオロギー的

・このイデオロギー的医学をうちたてたのは石黒忠憲という軍医総監

・それに最大の貢献をしたのがその配下の森林太郎（鷗外）

・鷗外など、軍医としてはとても評価に値するような医師ではなく、むしろ、まちがった医学イデオロギーを信奉することにより、日清・日露戦争を通じ、無辜の兵士数万人を脚気死させた国賊ともいってさしつかえない存在

・海軍に存在していた科学的思考も、だんだんイデオロギー的思考に籠絡されて太平洋戦争へ

・科学的推測に基づいて日米開戦に反対したのは、米内光政－山本五十六－井上成美－高木惣吉という海軍のラインの小さな気団のみになった

・米内光政－井上成美－高木惣吉というラインの奮闘で終戦が実現

・狂的イデオロギーの跋扈を食い止めた最大の貢献者

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

・「ある会合の席上、三笠宮が、自身陸軍少佐の身分でありながら軍の悪口を言い出したことがあった。『自分は陸軍へ入りたくなかったのだが、陛下の御命令でやむを得ず入った。今の陸軍は、お上の気持ちは踏みにじる、庶民のことは頭から馬鹿にしてかかる。どうして此のようなことが公然とまかり通るのか、一度徹底的な体質改善をする必要があるのではないかと思う』」。(45頁)

\* \* \*

hands on throttle & stick

#### 4. 闇夜の灯 2018年2月7日に日本でレビュー済み

- ・現実の井上さん個人を賛美することが読書の目的ではありません
- ・他国に防衛をゆだねて何の疑問もない社会

\* \* \*

smna

#### 5. あるべき国家のリーダー像のモデルの一つとして

- ・万巻の書を読むよりは当たり前だが効率的で頭に入り易い
- ・あるべき国家のリーダー像のモデルの一つ

○神格化されるような人でも自己本位の判断に徹する。（「海軍を減ぼしたのも東郷さんをはじめとする一部の海軍軍人」との弁あり）

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

- 正しいと思ったら言う。
- 徹底した合理主義，科学的根拠のないものは信じない。
- 金銭・女性関係がきれい。
- 「教育ほど意義のある仕事は他にない」
- 「とにかく英語だけはしっかり勉強しておけ」，英英辞典を使う授業，外国語習得の重要性，笑いの必要性。
- 「時間の守れない人はだめです」

\* \* \*



阿川弘之（1920-2015） <https://withnews.jp/article/>

\* \* \*

偏執狂的読書暦

## 6. 人物描写にこだわり

- ・著者の関心は戦争についてより井上の人物像にあった
- ・気難しいようでくだけている、情が薄いようで誰よりも部下思い、孤独なよ  
うで生涯女性にもて、少数だが理解者もいた
- ・理解されにくい人間性
- ・「人格ではなく職責を全うしたかどうかで評価されるべき」

\* \* \*

河内守

## 7. 信念に殉ずる

- ・『井上成美』は「提督三部作」の一つで、著者の最高傑作
- ・「成美」は「シゲヨシ」と読む
- ・晩年は娘にも死なれ、貧窮の中で孤独死
- ・沈黙の中に生涯を終えた井上の姿勢にはある種の清々しさがある
- ・阿川は、己の信念を固く信じ、信念に殉じた一軍人の愚直までの生涯を様々  
な挿話とともに紹介

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

・中でも、戦時中、海軍兵学校校長として井上の、軍人としてよりも優れた教育者としての姿を描いた

・井上は「負け戦 大将だけは やはりでき」という落首を残して中央から去る

\* \* \*

レブロン

## 8. 井上成美という人物

・最後の海軍提督，井上成美。音楽の才能に優れギター，ピアノ，琴を見事に弾きこなした人物。外国語に堪能で英語・フランス語を自由に操り，ヒットラーの「我が闘争」を原書で読んだ人物

・一度読むと何度も読み返してしまう，そんな魅力のある文章。

・幅広い教養と自分に対する厳しい姿勢をベースにして，冷静に，客観的に，現実的に社会や人間を見つめ，判断し，その考えを貫くことのできる，井上のような人間がいったい，政界・財界に何人いるのだろうか

\* \* \*

シャムトラまりん

## 9. 妥協なきプロ意識の塊

・誰からも好かれるタイプの人物ではない

・見方次第で評価がガラリと変わる



阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

・（事前に回避できるのなら）まず戦を起こさないこと、起きてしまった戦は長引かせないこと、とにかく国民の生命が危険に晒される事態を未然に防ぐ——

・井上校長の英語教育継続論なども、先々のことを見据えた上でのこと

・長い目で見て日本人にとってプラスになるか否か、井上はそれを冷静に見極める力を持っていた軍人

\* \* \*

flm4103

## 10. 善玉海軍説の虚構本

・この本は作者が善玉海軍説を広めるために井上の話のいいところ取りをして、針小棒大の脚色をしたに過ぎないおとぎ話

・井上は特攻兵器を統括する、マル特委員長でした

・「激闘駆逐艦隊」倉橋友二郎朝日ソノラマ刊 1987年に明記されており、信憑性は高い

・阿川が井上が特攻に関係していたと思わせたくないから、作為的に抜いたんでしょう

39人のお客様がこれが役に立ったと考えています

\* \* \*

柳沢はこの部分を非常に重く受け止めた。しかし、井上に関する全体的な肯定感を全面的にひっくり返すほどのものでもないと考えている。ほんとうに「他人に流されない、自分自身で物事を判断する」ことは、まことに厳しきことである。

\* \* \*

mazon Customer

## 11. 戦後60年を過ぎて

- ・戦前も戦中も面と向かって戦争に反対しつづけた軍人はいたのだろうか
- ・「あの戦争を止めるには人はどういう視点に立つべきだったのか」について、当時の視点から語られることは、あまりないのではないか
- ・それは当時の世界と日本の状況を熟知し、太平洋戦争に理論的に強固に反対し続けながら軍に所属し、戦後も生きた井上成美の生涯を軸にすると、見えてくる

\* \* \*

アマゾン太郎

## 12. 恐るべき視線を描く恐るべき筆

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

・提督の視線を抉り出す伝記を越えた巨編

・近代日本がそこにある。現代日本がそこにある。分析され、総合された形で  
そこにある

\* \* \*

環虚洞

### 13. キリストの生涯と相通ず

・論理的であることや自己主張する個人を煙たがる風のある日本の社会（『世間』）において、高い見識を保ち、10年先20年先を見据え、疎まれ、誤解され、場合によっては社会（『世間』）から排除されるのも覚悟の上で、左顧右眄することなく生涯を送った井上成美

・「井上の枕頭の本だったろうと思われるものに聖書と賛美歌があった。」「何故バイブル全巻をこれほど丹念に繰返し読んでいたのか、不思議であった。」

・気骨ある明治男

\* \* \*

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ



井上成美・いのうえしげよし（1889-1975）

\* \* \*

にやお提督

## 14. 高校・大学生に、参考書よりも先に読んでもらいたい

### 一冊

- ・伝記としての完成度が高い
- ・昭和史を語るうえで欠かせない一冊
- ・教育者としての井上の主張は、戦前戦後を経て現在でも十分に通用するものがある

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

・特に高等教育や言語教育，数学教育についての彼の主張は，いずれも現代日本の教育問題の核心を突く

・教育者層で本書がよく読まれる

・高校・大学生にこそ，参考書よりも先に読んでもらいたい一冊

\* \* \*

nan\_pou

## 15. 最後の海軍大将，強烈な意志と生涯

・作品をうかつに読んでいると井上の何が徳なのかが見えてこない可能性があること。大局的，本質的に観察してこそ井上の功績は認めることができるもの

・井上には性格的欠陥が多分にあった—思ったことは歯に衣着せずそのままズケズケと言ってしまう

・正しいと信じた事以外にはテコでも動かない頑固さがあった

・潔癖症であり，秩序だったものを病的に好む

・周囲との摩擦が絶えず起こり，敵対者を大勢作った

・井上のこの性格はついに生涯貫かれる事になったが，しかしこれをもって井上を過小評価することは出来ない

・ああいう狂気の時代にこの人物がいてよかったという結論に達するのが本書の主題

・正しい方向に向けて行動し発言できる人間がいなくなったらオシマイ

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

・現代の国の舵取りを見るにつけ、一層それを強く思う

\* \* \*

Amazon Customer

## 16. 派手な伝記ではないが、戦時中にこのような軍幹部 がいたことに驚く

・井上は日米開戦前から「南方諸国を侵略して資源を盗ってはいけない。資源がほしければ商取引をすればよい」と現代人と全く変わらない考え方を持っていた

・山本五十六に対して「どうしてはっきり『海軍はアメリカとは戦争できません』と答えなかったのか」と批判した

\* \* \*

引用紹介以上。まさに「紙上読書会」が想像できる醍醐味を感じた。さて、ここで得られた予想を実際の読書にどう生かすかは、その人次第。

私としては『井上成美（しげよし）』は、特に後半部分には熟読玩味すべき部分がありあるのではないかと思った。いずれ日を改めて、皆様に報告したい。

〔2020年11月14日（土）午前7時25分、編集了〕

立川談四楼著『談志が死んだ』（新潮社・2012年）第十章より

## ケース・スタディ

# 問題意識「立川談志亡き後の〔組織づくり〕は どのように進められたか」

正月二日は、談志一門なら必ず空けてある。例年なら新年会の日であるからだ。しかるに平静二十四年のこの日、談志はすでになく、むろん新年会もない。まさに一門総会を催すにうってつけの日であった。

午後、上野広小路亭四階の会議室に、直弟子がゾロゾロと集まってきた。紋付羽織袴の正装はなし、みな普段着だ。さすがにオメデトウは言わないが、「お騒々しいこって」「火事じゃないよ」ぐらいは言う。

本年中の真打昇進が内定している志らくの弟子、こしらと志ら乃の同席が許された以外に孫弟子の姿はなく、今日の決定事項は、それぞれの師匠が伝えることになっている。新年恒例の手拭の交換や前座へのお年玉などは日暮里寄席からこ広小路亭の正月公演で、との手筈だ。

「お別れ会ではお疲れ様でした」と、総領の土橋亭里う馬が切り出す。

「誰か談志を継ぐ人、家元を継ぐ人はいるかな？」

いきなりきたので、一門がどよめく。

「そらそうだ。こんな強烈な名前、誰も継がねえよな。ということは、家元制度は廃止でいいね」

一同、静かに頷く。

「したがって、上納金もなしと。滞っているヤツやいるか。もしいたら、遡って去年の十一月分まではキッチリと払うように。後はなんだ？ そうか、A、B、Cの三つのコースだが、必然的にこれもなくなるわけだな。ここまではいいか？」

中堅真打が手を上げる。

「Bコース、Cコースを切るということですか？」

「誰もそんなことは言ってない。家元制度がなくなればAだBだCだもなくなって、直弟子だけが残るということだ。Cコースはともあれ、芸能人コースでもあるBコースの中には、立川流発足当時、師匠への義理で入ってくれた人もいると思

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

う。そういう人はむしろホツとするんじゃないかねえかな。でもこのまま続けたい人とは友好関係を保つという方向でどうだろう」

「そうだ。家元が亡くなって家元制度は事実上消滅してるんだから。だけど例外が二人いる。高田文夫さんとミッキーさんだ。この二人は家元が認めた B コースの真打として立川藤志楼、ミッキー亭カーチスの芸名を貰っている。この二人から取り上げるわけにはいかないだろ。で、C コースについても、やはり原則論でいくしかねえだろ。貰った芸名は持っててもいいが、たとえ趣味の会であってもその名を使っては出られない、と。ま、強制でもなく、ゆっくり時間をかけて伝えていこう。

まだ家元が死んで二ヶ月も経っていないんだし。次に、どうする、一門をいずれ法人のように組織化するか、緩い任意団体というか親睦団体でいくかが……」

「緩くいきましょうよ」

「法人化なんて何年かかるやら」

「面倒くさいことはよしましよ」

「これだけいるんだ、一枚岩じゃないし」

「チンポコ団体がいい」

「おいよせよ」

おおそ予想通りに進んでいる。これまですべて談志が決めてきた。時に北朝鮮の独裁に例えられたトップダウンでやってきた。合議制の経験はなく、ボトムアップと言われてもその意味を知らず、召集をかけてもみな勝手に言いと、烏合の衆になるのは目に見えていた。

特別に集まりはしなかったが、お別れ会で少し、日暮里やこの広小路亭の楽屋で少しと、古手の真打が軽い打ち合わせをし、こう進めようとの流れを作った。その意を汲んだ総領の里う馬の進行は、ダジャレを許しつつも的を射たものだった。

「では緩くまとまるのでいいね」

「いいね。それは聞こえがいいや。それから、何か考えのある人は今のうちに言っといてくれよ。この総会には何の強制力もねえんだから。これを機に一門を辞めて他の協会に移るとか、弟子を率いて独立し、新たな一門を興すとか、何でも



## 阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら… 信州・やなぎさわ・かつひろ

いいんだ。どうしようも自由なんだ。……じゃ、これはこれでいいと。次に、その緩い団体の名称をどうする？ これまで落語立川流と言ったり、立川流落語会だったり、単に立川流と言ったりしてきたけど、そのままでもいいし、あるいは新たな名称にした方がいいのかどうか……」

それまで黙っていた志らくが勢いよく手を挙げた。

「立川流には師匠談志の意思がこもっています。立川流は談志そのものです。ですから前後にどんな言葉がくるにしてもシンボルである立川流の三文字だけは残してください」

談笑が続いた。

「立川はブランドとして定着しています。私はその立川ブランドで食っています。家元亡き今後は、このブランドがどこまでもつかかわりませんが、今は立川でいくべきだと思います」

「なるほど。どうだろ、これは総意ということでもいいかな。……では落語立川流、立川流落語会、立川一門会と色々あると思うが、立川の入った名称を考えて、手元のアンケート用紙に記入して、帰るまでに提出してください」

後ろ盾としての顧問の存在は心強いので、引き続きお願いすること。二つ目や真打への昇進基準は踏襲し、二つ目には落語五十席と歌舞音曲、真打には加うること五十席の計百席、ただし前座は三年の楽屋修行が条件で二つ目への抜擢はなく、その代わり真打ちへの年期制限はなしとした。つまり百席習得すれば短期間で真打に駆け上げられるのだ。

「その場合、師匠が弟子を推薦するわけだが、それを承認する機関というか、事務的なことも色々あるし、これから小さな決め事も何かと出てくると思うし、ま、旅行や宴会の幹事といったような、平たく言えば他の協会にある理事会みたいなものがあった方がいいと思うんだがどうだろう」

「そりゃ必要でしょう。いちいち全員が集まるわけにもいかないですから」

「まず対マスコミの窓口と言いますか、代表を選びましょう」

すでにマスコミは報じていた。スポーツ紙や週刊誌の芸能面が、立川流の今後について言及し、中には、“どうする、どうなる立川流?!”との少々悪意の感じられる記事もあった。だからとりあえずの組織作りが急がれたのだが、落語家中でも個性の強い立川流の面々、なかなか代表の適任者はいなかった。質量ともに備えた志の輔あたりが買って出ればいいのだが、すでに彼は先程、辞退している。その時、文字助の手が拳がった。え？ この人まさか代表になる

阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら…  
信州・やなぎさわ・かつひろ

つもりか？

「オレは外様なんで降りる。生え抜きの総領の里う馬、あんたがやれ。暫定政権なんだから、そういう時は年功で決めるのが一番収まりがいいんだ。で、オレは相談役ということで」

談志までを含む一門の全員がこの人の被害者だと言っても過言ではない文字助の見事な提案に、誰もが驚き、かつ深く納得した。文字助は六代目三升家小勝の弟子で勝松と名乗った。機転と敏捷さを談志に気に入られ、小勝の死後、談志門下となった。そして談平から文字助として真打になった。キャリアからいけば文字助だが、生え抜きの総領は里う馬である。そして里う馬からは持ちだしにくいところを文字助は自らの提案で救ったのだ。よっ、相談役。

最もいい形での着落を見て、里う馬がその場で四人の理事を指名した。左談次、談四楼、談幸、雲水である。すぐ下の左談次は片腕として、私は上下のパイプ役であることは明らかで、談幸は日暮里と広小路亭の顔付けをすべて担っていて、今後更に働いてもらうため、雲水は家元死去の際の連絡係としての目覚ましい活躍が認められといった具合で、里う馬はなかなか人を見ているのであった。

「もう一つ、大事な話なんだが……」

あらためて里う馬が話をつなげた。心なしか胸を張り、代表の顔になっている。

「談修は家元から真打の内定をもらってるし、こしらと志ら乃も志らくが認めた。二人は孫弟子として初の真打になるわけだが、披露目はいつ頃になるのかな」

志らくが二人に代わって答えた。

「家元の一週忌が済んでからと考えてます」

「そうか、談修は？」

「二人と被ってもいけませんので、私は来年の春にするつもりです」

「わかった。協力態勢が今日こうして出来上がったわけだから、何でも言ってくれ。一門全員でサポートするから。さて、二つ目だ。錦魚、平林、談吉、来てるか。家元は偉いな。全員を二つ目にして死んだ。前座のまま残さなかった。けどな、二つ目はまだ半人前なんだ。前座より自由だが、誰か真打の傘に入らないと生きていけないというのがこの業界の掟なんだ。現実に真打になる時、オレは真打だと一人で言っても誰も相手にしないわけだし、うちの弟子をそろそろというバックアップが必要なんだ。だから三人は、と言っても今すぐというわけじゃない、師匠が死んでまだ間もないし、誰

## 阿川弘之著『井上成美（しげよし）』（新潮社・1986年） Amazonレビューを俯瞰してみたら… 信州・やなぎさわ・かつひろ

かを選べたって無理な話だ。だけど頭に入れといてくれ。誰かを選んで、決まったら報告してくれ」

最後にひとしきり盛り上がったのは、一周忌に記念イベントをするかどうかについてで、何かやろうとは衆議一決したのだが、何をやるかでは様々な意見が出た。

「理事会はこれから月イチで開くつもりだけど、イベントの希望等は理事会に上げてくれ、議題にするから。何かあったらどうぞお近くの理事まで。以上、お疲れさん」

珍しく、里う馬がギャグを飛ばし、第一回の総会は散会となった。若手が連れ立ち、「どうぞお近くの理事までか」と笑っているのが妙におかしく、本来なら新年会の日であるのに、清く帰った。

半年経った頃、あらかたの問題は片づいた。家元制度を廃止し、コースも上納金もなくなり、任意団体“落語立川流”の名で、里う馬代表の下、新たな一步を踏み出したと、マスコミに公表された。総会の折に里う馬から、何か考えがあればと促されてもだんまりを決め込んだまま、一門の空中分解を願っていた一部勢力には、まあ気の毒であったが。

志の輔と志らくが理事に加わった。里う馬と理事四人で何回か理事会を開いてみると、仕事の都合で誰かが欠けてしまい、五人揃うことが少なかった。一度など三人しか出席しなかったこともあり、何を決めるにも五人は必要との判断から二人を補充し、七人体制となったのだ。

ありがたいことに、山藤章二、吉川潮両顧問の続投も決まった。懸案の一つ、二つ目の行く先だが、泉水亭錦魚が龍志門下、平林が談慶門下、談吉が左談次門下となって一門を安心させた。

一周忌のイベントも進展があり、具体化した。十一月二十一日の命日を初日とし、三日間の興行が決定したのだ。三日目は奇しくも旗日で昼夜の公演、つまり三日間四階の興行となり、会場については談志縁の紀伊国屋ホール、国立演芸場などの案も出たが、結局あの伝説の『芝浜』が披露された読売ホールと決まった。

決定を聞いた時、一門に戦慄が走った。読売ホールのキャパは千百なのである。四回で四千四百人の動員、それを果たすことが出来るだろうかと緊張したのだ。直弟子総出演、孫弟子は、真打昇進を控えているこしらと志ら乃のみ出演、とにもかくにもやるしかない！ その覚悟が一門を引き締める効果となったが、緩い任意団体には普段ありえない一枚岩の結束になった。（同書 189 ペ）